

# 阪神・淡路大震災からの復旧・復興

1995（平成7）年に発生した兵庫県南部地震は、多くの命と財産をうばいました。人々は自分の力で生活を立て直すことを原則とし、ときにははたがいに助け合い、行政の助けを得ながら復興の道歩んできました。  
ここでは、行政のはたらきについて学び、復旧・復興の道のりについて考えてみましょう。

## 直後

### 消防隊の救命・救助

地震の直後、多くの住民がくずれた家屋の下じきになり、広い地域で火災が発生しました。

被災した地域の消防隊は、被害の小さかった地域や全国からの応援を得ながら救命・救助活動を行いました。

消防隊がすぐに来られなかった地域では、住民が力を合わせて家屋の下じきになった人々を助けたのよ。



## 地震発生直後

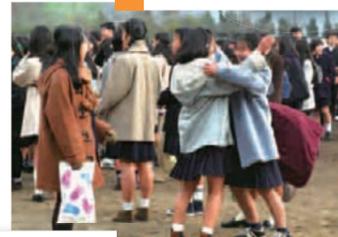


(写真提供 神戸新聞社)

## 2~3週間後



## 1か月後



(写真提供 神戸新聞社)

## 1か月後

### ライフラインや道路の復旧、学校再開

地震から1か月ぐらいたつと、ライフラインや道路の復旧が進み、学校や仕事も元にもどってきます。家屋の被害がなかった人は安全がもどったように感じ始めることができました。

## 1年後

### がれきの処理が終りようし、復興へ

1430万トンのがれきがうめ立てなどに使われました。復旧が終わり、自分を被災者と意識しない人も多くなりました。復興に際しては、住民と行政が話し合い、地震に強い街づくりが進められました。

## 1年後



(写真提供 神戸新聞社)

街並みは数年できれいになったけど、家族や住むところを失った人たちにとって、復興は長い道のりになるね。



## 直後から

### 避難所の運営

地震では、多くの建物がたおれ、家を失った人がたくさんいました。行き場をなくした人々は、近くの小学校などの避難所に身を寄せました。ピーク時には、約1200か所の避難所に、約32万人が避難しました。



(写真提供 神戸新聞社)

## 半年後

### 仮設住宅の設置

震災発生のわずか3日後から、仮設住宅の建設が行われました。8月には約4万8千の仮設住宅が完成したことにより、ほとんどの避難所は閉ざされました。

このころには多くの人にとって、住まいの問題も解決し、生活が落ち着いてきました。

仮設住宅などでは、だれにも気づかれずに高い者がひとりきりてなくなる「こ独死」の問題も起こったんだよ。



(仮設住宅に入居した人は、被災地全体の約1.7%でした)

## 半年後



(写真提供 人と防災未来センター)

## 数年後

### 災害復興公営住宅の供給

震災からの復興で欠かすことができないのが、家を失った人の住居の確保です。仮設住宅等の不自由な生活をしいられている被災者の生活を一刻も早く再建するため、災害復興公営住宅の建設が進められました。

行政は、住む場所の確保に大きな役割を果たしてくれたね。



(写真提供 神戸新聞社)

(写真提供 人と防災未来センター)

はんきゅういたみえき  
阪急伊丹駅



じしん  
地震直後



ふっ きゅう  
復旧



(写真提供 神戸新聞社)

(写真提供 神戸新聞社)

こうべ ひげご  
神戸市兵庫区



じしん  
地震直後



ふっ こう  
復興



(写真提供 神戸新聞社)

## 災害に係る費用の負担

災害に係る費用は基本的に被災した県や市町の負担とされています。

阪神・淡路大震災の際、国は救命・救助や避難所の運営、仮設住宅の設置といった応急の費用のほとんどを負担するなど多大な支えんを行いました。しかし、兵庫県や被災した市町の復旧や復興の負担は大きく、今も費用の返済を続けています。

2011 (平成23) 年の東日本大震災からの復旧・復興に際しては、復旧・復興までふくめて国が費用を負担し、被災地の負担を軽くすることになりました。



## 地震か、震災か

「地震」と「震災」は厳密に区別しなければなりません。家屋の倒壊、火事、それにもなう多くの人命や財産のそう失。この「阪神・淡路大震災」を引き起こしたのが「兵庫県南部地震」になります。

「震災」の大きさは、地震の大きさだけでは決まりません。例えば、兵庫県南部地震と同等の鳥取県西部地震では死者はゼロでした。また、東北地方太平洋沖地震の際は、防潮堤のない地区の住民全員が10分で避難した例もありました。震源の位置に加え、建物の強さ、住民の危機意識など「社会の防災力」が高ければ、地震のひ害をおさえることができるのです。

## 阪神・淡路大震災の経験をふまえ、完成した交流型仮設住宅

阪神・淡路大震災で高れい者のこ独死が起こったことをふまえ、東日本大震災の際は、住民が顔を合わせやすい仮設住宅が建設されました。げん関を向かい合わせにし、通路を屋根付きウッドデッキでつなぐとともに、スタッフが朝夕のじゅん回を行うなど、入居者のこ立を防ぐくふうがなされています。



(写真提供 岩手日報社)